OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	介護者の性別にみた在宅介護の現状
Author(s)	杉浦, 圭子; 足立, 登志子; 伊藤, 美樹子 他
Citation	日本看護研究学会雑誌. 2003, 26(3), p. 254-254
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/52424
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

149)　介護者の性別にみた在宅介護の現状

○杉浦圭子，足立登志子，九津見雅美，伊藤美樹子，三上洋
（大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻）

【目的】2000 年 4 月に「介護の社会化」を目指し、介護保険法が施行されたが、在宅介護者は現在でも重要な役割を果たしている。欧米では介護の内容や介護ストレスが介護者の性別で異なることが明らかにされているが、本邦では介護者に女性が圧倒的に多かった背景から介護者の性差に注目した報告は少ない。近年、配偶者による介護は増加し、それに従い男性介護者が増加しており、男性介護者と女性介護者の特徴を明確化し、それをふまえた援助が必要だと考えられる。本研究では、本邦の介護者における被介護者の心身の状態、介護の内容、介護ストレスの程度の性差を明らかにすることを目的とした。

【方法】調査方法は大阪府 H 市在住の介護保険サービス利用者から層化無作為抽出した 2020 人に対し、2002 年 8～9 月に、郵送による無記名自記式質問紙の配布・回収を行った。1287 人（63.7%）から回答が得られ、介護者不在等を除く 868 組の介護者と被介護者を分析対象とした（有効回答率 67.4%）。調査項目は介護者・被介護者の基本属性、被介護者の要介護度・認知障害の重症度、介護日数（/週）、介護時間（/日）、ADL/IADL に関する介護内容、介護保険サービスの利用状況、副介護者の有無、介護負担感、介護者のうつ状態である。分析には χ^2 検定、t 検定、Mann-Whitney の U 検定、共分散分析を使用した(有意水準:5%未満)。

【結果】介護者の基本属性：全体の 27.1%は男性で、平均年齢は 60.2±12.0 歳(範囲 19-91)だった。平均年齢は男性 65.0±12.5 歳、女性 58.3±11.3 歳と男性の方が高かった。被介護者との続柄は配偶者が男性で 54.7%、女性では 27.3%と、男性の方が配偶者の割合が高かった。被介護者との同居率は男性では 81.9%、女性では 76.8%と男性の方が高い傾向がみられた(n.s.)。被介護者の基本属性：被介護者の平均年齢は 79.2±9.3 歳(範囲 43-101)で男性介護者の被介護者は 75.8±9.5 歳、女性介護者の被介護者は 80.5±8.9 歳と女性の被介護者の方が年齢が高かった。被介護者の心身の状態：要介護度では介護者の性別によって差はみられなかったが、認知障害の重症度では男性介護者の被介護者では 1.4±2.7 点、女性介護者の被介護者では 2.1±3.2 点と女性の方が被介護者の認知障害が重かった。介護の内容：介護日数では性差はみられなかったが、介護時間(介護者の年齢で調整済み)では男性で 8.9±0.7 時間、女性では 11.1±6.7 時間と女性の方が長く、介護内容は、女性で「食事介助」「整容」「階段昇降」「更衣」「服薬」「入浴」「食事準備」「金銭管理」「買い物」「洗濯・掃除」「代理での電話」が多かった。介護保険サービスの利用状況では、ﾎｰﾑﾍﾙﾌﾟの利用頻度は男性で 2.4±2.6、女性では 1.6±2.3 と男性の方が高く、ﾃﾞｲｹｱ・ﾃﾞｲｻｰﾋﾞｽの利用頻度は男性で 1.9±2.2、女性で 2.2±2.2 と女性の方が高い傾向がみられた(n.s.)。ｼｮｰﾄｽﾃｲの利用の有無、副介護者の有無は、性差はみられなかった。介護ストレスの程度：介護負担感は男性で 4.2±1.0 点、女性で 4.4±1.2 点と女性の方が高く、うつ状態(範囲 0-24、得点が高い程うつであることを示す)では、男性では 5.4±5.0 点、女性では 6.8±5.4 点と女性の方が高かったが、得点分布は、女性は 2 点付近を頂点とする一峰性だったのに対し、男性では 2 点と 12 点付近を頂点とする二峰性を示すことが明らかになった。

【考察および結論】①男性は被介護者の認知機能が低下すると介護役割を辞めてしまうと報告されており、そのため、男性の被介護者の認知機能の重症度が低くなっている可能性があると考えられる。②女性の被介護者は男性より高齢で認知障害は重く、介護時間は長かった。さらに、女性は日々の家事関連の介護に加え、入浴等の労作の多い身体介護を行っており、このことは介護負担感やうつを高める要因となっていると考えられる。③男性介護者の中にもうつ状態が比較的高い群も存在することも明らかとなり、今後男性介護者のストレス関連要因の検討が必要であると考えられる。